

第9組 慶正寺 浅野 淑子

2016年の11月に住職であった夫が肝臓がんのため亡くなり、お寺には私と、大学生・高校生・中学生の子供三人が残されました。癌発覚から半年ほどの死で、私たち家族にとっても門徒の皆さま方にとっても大変なショックで、当時は荒れた大きな波に飲み込まれたようで、とにかく一日一日をやり過ごすので精一杯でした。門徒の皆さま方、近所の方々、組内のお寺さんや夫の友人の方々、身内の者に助けられて、何とか去年の11月に一周忌を迎えることができ、やっと少し生活が落ち着いてまいりました。門徒の皆さまや親族と相談し、私が住職とさせていただきますとなり、2017年4月に責任役員さんとともに、本山での住職修習を受け、宗務総長より任命証をいただき住職となりました。28日の午前中に任命式があり、親鸞聖人の御影の前で任命証をいただき、大変篤く尊いものを受け取ったと感じ、感動したことを覚えています。

私はお寺に嫁いで23年になりますが、お寺のことも浄土真宗のことも何も知らないでお寺に参りました。その当時住職であった義理の父は、そんな私に「今は何もわからなくていい。一生かけて死ぬまでに親鸞聖人のお弟子になればいい」と言ってくれました。任命式の時にその言葉が、すーっと胸のうちに自然と浮かんでまいりました。

お寺に来たばかりの頃は、念仏がなぜ尊いのか分からず、やはりどこかで「念仏を唱えて何になるのか」という思いもあって「南無阿弥陀仏」をなにか形だけの呪文のように捉えていたと思います。そして義理の父・母・夫が亡くなった今、ようやく「南無阿弥陀仏」という念仏が、私たちの生き方に関わる大切なものであるということが、少しずつ身をもって感じられるようになりました。念仏するとき、義理の父が母が夫が、私達と共にあり、私たちを案じているのを感じます。

親鸞聖人は『歎異抄』の中で「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と書いておられます。このよきひととは法然上人のことであり、「ただ念仏して弥陀に助けられなさい」という言葉を、親鸞聖人は法然上人の言葉として、大切に受けとめられました。

阿弥陀の世界を念じ続けていく、私たちの価値観を超えた世界を念じて人間の物差しから解放され続けていくことが、親鸞聖人が出遇った教えでした。

私も門徒の皆さまと、親鸞聖人からいただいた「阿弥陀を念じながら生きる」という世界を大切にし、受け継いでいきたいと存じます。